

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成25年 8月21日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 高等教育研究開発推進センター

職 名・学 年 特定助教

氏 名 田 中 一 孝

助成の種類	平成25年度・国際研究集会発表助成		
研究集会名	The International Plato Society, X Symposium Platonicum, the <i>Symposium</i> (国際プラトン学会 第10回シンポジウム:プラトン『饗宴』)		
発表題目	The Immortality of a Philosopher in Plato's <i>Symposium</i> (プラトン『饗宴』における哲学者の不死について)		
開催場所	イタリア共和国・トスカーナ州・ピサ・ピサ大学		
渡航期間	平成 25年 7月 12日 ~ 平成 25年 7月 22日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 ■ 無 □ 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	200,000円	
	使用した助成金額	200,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空運賃:196,000円	
		滞在費の一部として:3,000円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)		

成果報告書および成果の概要は、財団に郵送(あるいは持参)するとともに、Excel・Wordファイルでメール送信して下さい。メール送信分の印鑑は不要です。

成 果 の 概 要

高等教育研究開発推進センター

特定助教 田中一孝

<派遣集会の概要>

報告者は、7月15-20日の6日間にわたり、イタリア共和国トスカーナ州ピサにあるピサ大学において開催された、国際プラトン学会 第10回シンポジウム(The International Plato Society, X Symposium Platonicum, <http://www.aicgroup.it/x-symposium-platonicum>)に参加し、口頭発表を行った。

国際プラトン学会は、世界のプラトン研究者によって構成され、西洋古代哲学に関わる学会の中でも最も権威ある学会の一つである。年に5-6回の国際研究集会を開催し、3年ごとにはプラトンの特定の著作をテーマにした大会が開かれる。報告者が参加・発表をした研究集会はこの3年ごとの大会にあたる。前回大会においては、30カ国以上の国から、約260人の専門研究者、一般参加者も含めれば600人以上の参加があったと集計がされている。今回大会においては、報告者も含め、100人強がパラレルセッションの形式で口頭発表をし、10人以上がプレナリーセッションないし、講演の形式で研究発表を行った。発表者たちの論考は、学会発行のProceedingsに所収されており、Web上で公開もされている

(<http://www.aicgroup.it/x-symposium-platonicum>)。

これまでの大会と同様、当該集会においては西洋古代哲学・西洋古典学の分野を代表する研究者が多数参加しており、その発表の全体的な質は非常に高く、先進的かつオリジナリティのある発表が多かった。一般的に哲学分野における大規模な学会では、特定の思想家の一つの著作に焦点を絞ったものは少ないが、今回の大会テーマはプラトンの対話篇『饗宴』ということもあり、参加者たちは文献学的な厳格性に配慮しながら、濃密かつ集中的な議論を行う貴重な機会を持つことができた。この規模で参加者たちの専門がほぼ重なる集会は、他の分野においても稀であろう。またこの集会は、研究者間のコミュニティを創発・強化することを重要視しており、会期中には常にランチセッション、コーヒーブレイク、ディナー、さらにはエクスカッションやクラシック鑑賞の機会が設けられ、参加者たちは自然な仕方で親睦を深め、最新の研究動向から各国の研究傾向まで、幅広く情報共有することができた。

<発表の概要>

報告者の発表の目的は、プラトン『饗宴』における「不死(*athanasia*)」の概念を分析し、そこで描かれる哲学者の不死がいかなるものかを明らかにすることであった。

『饗宴』においてソクラテスは、マンティネイアのディオティマの言説を紹介する形で、死すべき本性は常に生成消滅しながら、可能な限り不死を求めると主張する。人間は、たとえば子どもや不滅の徳などの「子孫」を出産することで言わば擬似的に不死を達成するのだとされる。他方で、ディオティマは、哲学者こそ神に愛され、もし人間に可能であれば、その哲学者こそ不死になるという言葉で議論を結ぶ。この発言は哲学者が「子孫」を通じた仕方ではなく、彼/彼女自身が不死になることを示唆している。だが言うまでもなく哲学者は死すべき肉体を

持った存在であるため、ここでの不死がいったいどのようなものなのか、非常に多くの解釈者たちが問題としてきた。

『パイドン』『国家』『パイドロス』などの他の対話篇において、プラトンは魂の不死を認めているが、こうした不死を『饗宴』に読み込むことは難しいと従来の解釈者たちは考えてきた。なぜなら、それらの対話篇は人間一般の魂の不死について述べているのに対し、『饗宴』はただ哲学者の不死のみを特別視しているからである。これに対して報告者は、『饗宴』議論を『パイドン』における「死の練習」の概念と比較検討しながら、哲学者の不死は、魂の不死を前提としていることを明らかにした。その上で、不死概念にはその程度や質において様々な形があることを指摘し、哲学者の不死とは、極めて純粋な仕方で魂のみの思考活動を行う状態のことであることを主張した。

国際学術出版社 Brill からこの研究集会の論文選集が出版されるので、申請者は当該学会での意見交換を踏まえた上で、この選集へ投稿し、本研究の成果を広く公開することを目指している。

<謝辞>

最後に、報告者の発表計画を採用し、援助をしてくださった京都大学教育研究振興財団に厚く御礼を申し上げます。官民を問わず、人文学系の研究に対する研究助成が少ない中、このようなご支援はまことに貴重であり、ありがたく思う。